

「性欲」の解釈3つとそれぞれの結論

1, アダムとエバがエデンの園で善悪の知識の木の実を食べたことについて、現実的にまた理論的に見て、3つの解釈が存在する。3つとも二人の行為は性交を意味しているという観点で説明する。

- ・教会的解釈: アダムとエバは、神から禁止されていた善悪の木の実を食べたことによって、心身に罪と死が入った。それは子孫そして人類全体を罪と死に追いやった。(性欲は罪)
- ・唯物論的解釈: 性欲は自己保存のため必要な根源的欲求。善悪の知識は、天地を支配し人間社会を維持発展させるための手段。神の存在は不要。(性欲は善)
- ・論理的解釈: 性欲は、愛を育成することも害悪を生み出すこともできる。神は、霊的に未熟な人間に愛を教えることができず、害悪に対する警告のみを与えた。(性欲は愛も罪も生む)

2, それぞれの解釈から導かれる結論

- ・教会: 人間はみな罪人であり、神の義を実践することはできない。人間を罪と死から救うために、キリストが誕生し十字架によって贖罪を行った。その福音を信じ伝道することが人々の使命。この世の罪を裁き清算するために、キリストは再臨されると宣教した。
- ・唯物論: 神は死んだ。地上の被造物は人間が支配し、種が繁栄するためのもの。人間の欲求が平等に満たされるために、全体主義国家の樹立が必要と主張した。
- ・論理: 人間は神の愛を学び、その愛を自ら実践することが必要。それによって、盲目的な欲求から生じる害悪を防ぎ、神様が喜ぶ世界を築くことができる。そのために神様はイエスと聖霊をこの世に遣わした。

3, それぞれの解釈に基づいた行動や歴史的事実

- ・教会: ユダヤ人は、姦淫した女を石打にしたり...罪の指摘や裁きに熱心で、救世主を待ち望んだ。ローマ教会は、免罪符を販売して収入を得た。18世紀のポストミレニアム運動は、帝国主義と一体化し権力者の立場でキリスト教伝道を行った。
- ・唯物論: マルクスは共産主義思想を確立し、資本家と労働者の階級対立の解消を訴えた。レーニンや毛沢東は善悪の裁定者として人民を主導し敵対勢力の大虐殺を行った。米民主党は、人種差別に対する暴動や不法入国、犯罪等肉欲的な欲求に対して寛容な政策をとった。
- ・論理: 自分の救いよりイスラエルの民の救いを願ったモーセ、人の罪を十字架で贖ったイエス、労働も救いも共にしているアーミッシュ、米国人の生活と信仰を守るために無報酬で闘ったトランプ大統領、等々
優れた愛を数限りなく見ることができるが、愛が繋がりが循環し社会を築くまでに至っていない。(アーミッシュを除いて...)

4, それぞれが目標とする社会／世界

- ・教会: 涙も死もない都に入って神と共に住み命の木の実と水を無償でいただく。不信仰な者は外で暮らす。
- ・唯物論: 全員が与えられた仕事を忠実に務め、平等に報酬を得る。物質的な欲求を拡大しまた満たしていく。
- ・論理: 衣食住を自給自足できる自治体を築きその中で物の流通と愛の流通、外部との自律的交易を行っていく。

5, それぞれの目標に到達する道筋

- ・教会: 人にできるのは信仰と伝道。再臨を待つ。その時が突然訪れて神様が全ての人を裁き命と死に渡す。
- ・唯物論: 国家権力を掌握拡大して全体主義的政策また統治組織を作る。権力者の善悪の知識で全世界を統治。
- ・論理: 人それぞれが聖霊に耳を澄まして自律する。お金でなく愛で人間関係を築き、必要を満たしていく。